

平成 28 年 12 月 7 日より 15 日までの約一週間、本学提携校であるアメリカ合衆国西オレゴン大学より同学教育学部長始め 8 名の教員・学生が埼玉大学を訪問されました。これまで同学とは特に芸術表現系の教員学生間での交流をここ 10 年来続けてきています。今回は初めて教育学部長始め教育学部の先生方 2 名も同行いただき、講演や附属学校訪問等の活動をしてくださいました。本学教育学部教員・学生との本格的な交流がスタートできた記念すべき訪問となったと思います。

教育学部長表敬訪問、学長表敬訪問に始まり、今回の交流は盛り沢山の内容でした。特に教育学部長である Mark Girod 氏の講演は、教育学部教授会のなかで開催されました。Chaos in the American Educational System and Efforts to Stay Focused at Western Oregon University と題した 30 分ほどの講演のなかで、Girod 学部長は現在のアメリカの国家レベルあるいは州レベルでの教育改革への努力について、特にオレゴン州の教育の現状を踏まえながらお話してくださいました。劇的な教員の不足と教育者への相対的に低い給与等、現在のアメリカが抱える教育問題を切々とまた力強く語ってくださいました。日本の教員の現状ともオーバーラップする部分が多々あり、深い感銘を私たち教育学部の先生方に与えたように思われました。Girod 学部長は現在若干 46 歳で、オレゴン州でも最年少の大学学部長とのこと、先生の今後の大学運営に大きな期待が持てますし、氏の存在は、今後の両学教育学部間の交流に大きな可能性を与えるものとなると強く感じました。

他に同学部教師教育コース長である Mary Bucy 教授の講演、そして同じく社会科教育コースの Kenneth Carano 准教授の講演も、共に新鮮な刺激に満ちたものでした。特に、Carano 先生の講演は、講演中に現地アメリカの音楽教育者とスカイプでつながり、聴講者も巻き込んだ音楽クイズ（音楽を聞いてそれがどこの地域の音楽かを当てるもの）を日本とアメリカで同時に行うという SNS を駆使した講演で、実に刺激的であり、現代の教育の可能性を強く感じさせるものでした。

同学教養学部の Kim Hoffman 教授は、彫刻のご専門であり、今回の訪問では先生の研究室の二名の学生も同行されました。本学の石上城行准教授の彫刻授業を参観し、受講生と親しく交流をすることができました。Hoffman 教授による美術教育と先生ご自身の彫刻や版画作品についての講演も、大変興味深いものでした。同時に、二名の同行学生による自身の作品についての短い紹介もしていただき、本学の学生たちはその表現のユニークさに目を見張っていました。また、講演と合わせて、Hoffman 教授と二名の学生による版画作品展を滞在中にコモギャラリーで開催しました。本来は彫刻作品展にしたかったのですが、彫刻作品をアメリカから持ってくることは難しく、今回は先生方の得意とする版画作品の展示となりました。日本人との感性とは異なる実にユニークで大陸的な感覚に溢れた作品群の展示となりました。

こうした学術的活動の合間に、一行は埼玉大学教育学部附属小・中学校を訪問され、それぞれ生徒児童と親密に交流をされました。特に小学校では 5 年生の総合的学習の時間を国際交流の時間としてくださり、子どもたちは予めゲームを用意してくれていて、一行と一緒にそれに興じていました。とても自然な国際交流活動がそこで展開されていました。また、小学校では給食もいただきました。アメリカでも学校給食はありますが、やはり日本のそれの方がずっと美味しく、ホームメイドの味がするとのこと

でした。中学校での掃除時間にも一行は大変感銘を受けている様子でした。アメリカでは生徒たちが掃除をすることはなく、業者がやるそうです。是非とも帰国したら地元の学校に提案してみたいと強く先生方はおっしゃっていました。

西オレゴン大学ではこうした大学の附属学校はないそうで、今後地元の学校のなかで、大学と密接につながる学校を実験的に作りたいものですと Girod 学部長は本学の附属学校システムに感動されながら語って見えました。

以上の公的な交流活動の他、中林副学長主催のオフィシャルランチを始め、教授会主催の忘年会へのご招待、あるいは細渕教育学部長主催のフェアウェルパーティ等、盛り沢山の行事に全て参加いただき、そうした場で本学教育学部の若手教員と密に交流をしていただくことができました。

滞在の最後には、国立劇場に歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」の観劇にお連れしました。12月14日、丁度赤穂浪士討ち入りの日その日でした。劇もまさに討ち入りの場面の幕でした。その前日、教養学部のビュールク准教授の授業で、歌舞伎について、そして今回の討ち入りの場面について詳しい講義を英語で一行は受けており、おかげで当日の劇の内容が一行にはよく理解できたのではと思います。

全てを書ききれていませんが、今回の訪問記のおおまかを記させていただきました。国際交流を有名無実化しないためにも、実質的な教員間そして学生間交流が今後更に求められると思います。確かに受け入れる側はいろいろな準備をしなければならず、また英語等の問題もあり、躊躇しがちにはなると思います。しかしながら、やはり交流の成果は大きく、特に若手の先生方そして学生たちには、グローバルな視野から物事を考える力を培える大切な機会になるはずです。今回の西オレゴン大一行との交流で、特に教育学部の若手教員のなかで、来年度は是非とも同学を訪ねたいと希望する先生も出てきています。両学の関係が今後更に親密になり、実質的な研究交流が盛んに交わされるようになることを願って今回の訪問記を閉じたいと思います。



学長表敬訪問



Girod 学部長による講演（教授会にて）



Kenneth Carano 先生による  
スカイプ授業



附属中学校にて（Girod 学部長と）



附属小学校での交流の様子



彫刻授業の見学（石上准教授）



西オレゴン大学生による自作の紹介  
（Julianne Belden さん）